Journal of the Research Institute for
Old Japanese Manuscripts of Buddhist Scriptures
Vol. II 2017

日本古写経研究所研究紀要　第二号（平成29年）

春日版「五部大乗経」本文と底本選択理由

佐々木　勇

春日版「五部大乗経」本文と底本選択理由

佐々木　勇

本稿の目的

本稿の筆者は、鎌倉後期に開版された春日版「五部大乗経」の底本について、次のことを述べた。(1)

『大方等大集経』『大方広仏華厳経』『摩訶般若波羅蜜経』『大般涅槃経後分』―底本は思渓版。

『大般涅槃経』―底本は東禅寺版補刻本。

ただし、春日版「五部大乗経」は、日本伝来の古写経系本文をも取り入れている。

本稿の目的は、次の二点である。

A　鎌倉後期開版春日版「五部大乗経」が単なる宋版の覆刻ではなく、古写経系本文を取り込んでいることを具体的に示すこと。

B　春日版「五部大乗経」の底本選択理由を考察すること。

一　本稿の研究方法と対象資料

1　研究方法

本稿の目的達成のためには、春日版「五部大乗経」と宋版および古写経の経本文とを比較する外ない。

本稿では、まず、春日版が思渓版に依拠していることを別稿（註（1））で明らかにした『大方等大集経』『大方広仏華厳経』『摩訶般若波羅蜜経』『大般涅槃経後分』について、春日版と底本の思渓版および古写経とを本文比較する。それによって、春日版本文が思渓版と一致せず古写経と一致する箇所が有ることを確認する。

次に、春日版「五部大乗経」が東禅寺版を底本とする『大般涅槃経』について、春日版と底本の東禅寺版・思渓版および古写経とを比較する。

最後に、これらの対照から知られたことを基に、春日版「五部大乗経」の底本選択理由を考察する。

2　対象資料

本稿の対象資料は、次の鎌倉後期開版春日版「五部大乗経」二部と宋版一切経諸本および古写経である。対象とした春日版「五部大乗経」についての詳細は、別稿（註（1））を参照願いたい。

①春日版「五部大乗経」―愛媛県砥部市光明寺蔵本・滋賀県北小松樹下神社蔵本[2]。

②宋版一切経

東禅寺版―醍醐寺蔵本。東禅寺版補刻本―書陵部蔵本。開元寺版―知恩院蔵本・書陵部蔵本。思渓版―増上寺蔵本・岩屋寺蔵本・長瀧寺蔵本。

③古写経

聖語蔵本―『宮内庁正倉院事務所所蔵　聖語蔵』経巻　カラーデジタル版』（宮内庁正倉院事務所）。七寺蔵本―国際仏教学大学院大学古写経研究所蔵カラー写真。金剛寺蔵本―（同上）。その他、博物館・図書館等刊行目録・図録やインターネットホームページにおける公開画像。

右の資料調査のため、国際仏教学大学院大学日本古写経研究所・愛媛県歴史文化博物館・樹下神社（滋賀県大津市北小松）・醍醐寺・知恩院・増上寺・岩屋寺・長瀧寺・書陵部御当局に、大変お世話になった。記して御礼申しあげる。

大正蔵　所在　春日版本文	聖語蔵本本文	七寺蔵本本文	思渓版本文
0009a06：菩薩品第二之二	／	菩薩品　之二	（同）
0009b09：以大神通光	以大神通	以大神通	（同）
0009b17：説偈言	説頌曰	説頌曰	（同）
0009b18等：修習於念心	修集於念心	修集於念心	（同）
0009b21：増長於善法	増長諸善法	増長諸善法	（同）
0009b22：猶善守門者	護善守門者	護善守門者	（同）
0009c02：具得大智光	其徳大智光	其徳大智光	（同）
0009c12：能利益人天	能利益天人	能利益天人	（同）

二　春日版・思渓版と古写経

まず、本文を思渓版に依拠している『大方等大集経』『大方広仏華厳経』『大般涅槃経後分』『摩訶般若波羅蜜経』について、古写経本文と比較する。

1　『大方等大集経』

『大方等大集経』巻第二について、底本の思渓版、および聖語蔵本神護景雲経[3]・七寺蔵古写経との本文対照結果を表覧する[4]。本文所在を、便宜上、大正新修大蔵経の所在で最上段に示し、春日版本文を置いた。その下に、春日版本文と異なる字に傍線を引き、諸本本文を記す。同じ場合は（同）、対応本文が存しない場合は／、欠巻の場合は（欠）とする。同一の対応が複数存する場合は、所在に「等」を付して重出を避けた。改行位置のみの相違は省略し、単一本の誤刻・誤写と判断される例は、注に掲げた[5]。

0009c12: 令斷有漏法
0009c13: 不論爲無爲
0009c14: 寂靜光無礙
0009c16: 若有大乘定
0009c29: 我說無量光
0010a01 等: 即得此諸光
0010a10: 悲心悲因緣
① 0010b20: 如是邪見
0011a16: 修習七財
0011a25: 衆生捨愛着
0011c02: 名四顚倒
0011c10: 菩提清淨寂靜
② 0011c15: 爲客煩惱
③ 0011c22 等: 無想無緣
0011c24: 無取著
④ 0011c24: 是名無想無緣
0012a03: 不愛現在
0012a06: 是名無身
0012a25 等: 不可以身得
0012a26: 心如幻
0012b01: 不可說空
0012b08: 了知意之眞實
0012b13: 無住處
0012b13: 色受想行
0012b18: 菩提亦無
0012b22: 是一如
0012b23: 無名字故名之爲空
0012b24: ／
0012b26: ／
0012b27: 無言無說故
0012c11: 無所繫屬
0012c15: 是菩提

念斷有漏法
不謬爲無爲
寂靜光无闇
若脩大乘定
佛說无量光
即得是諸光
悲心悲心因緣
（同）
具脩七財
衆生捨貪着
名四　倒
菩提淨以寂靜故
（同）
（同）
无取无著
（同）
不受現在
　名爲无身
不　以身得
心如幻故
不可說虛
　知意　眞實
無住處心
色受想行識
菩提亦爾
是一智
　／
無名字故名之爲空
若無諸法
無言　說故
無所繼屬
是菩提如菩提

念斷有漏法
不謬爲無爲
寂靜光无闇
若脩大乘定
佛說無量光
即得是諸光
悲心悲心因緣
（同）
脩具七財
衆生捨貪著
名四　住
菩提淨以寂靜故
（同）
無相無緣
无取无著
是名無相無緣
不受現在
　名爲无身
不　以身得
心如幻故
不可說虛
（欠）
（欠）
（欠）
（欠）
（欠）
（欠）
（欠）
（欠）

（同）
（同）
（同）
（同）
如是所見
（同）
（同）
（同）
（同）
爲欲煩惱
無想
（同）
是名　無緣
（同）
（同）
（同）
（同）

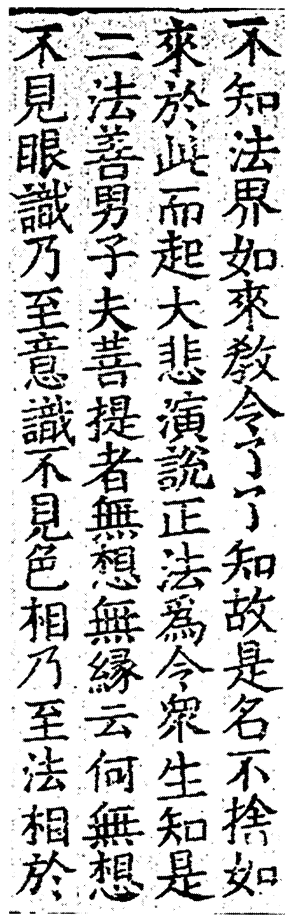
0012c17等：是名法流布	名法流布	（欠）	（同）
0012c18：如来眞實	眞實	（欠）	（同）
0012c20：不生不滅	不生不出	（欠）	（同）
0012c20：不生不滅	不生滅	（欠）	（同）
0012c27等：住外者謂相	作外者所謂想	（欠）	（同）
⑤ 0013a12：無衆生義	（同）	（欠）	無衆生
0013a21：無漏無取	无取	（欠）	（同）
0013a27：名爲寂靜	名寂靜寂	（欠）	（同）
0013b04：爲寂靜光明	之寂靜光明	（欠）	（同）
0013b08：遠煩惱	遠離煩惱	（欠）	（同）
0013b27：已調一切魔	以調一切魔	（欠）	（同）
0014a03：無量功德善男子	無量功德	（欠）	（同）

春日版と聖語蔵・七寺蔵古写経とでは、本文の開始・終了位置・行詰め・改行位置が大きく異なる[6]（改行位置の相違は、別稿（註（1））に記したため、右表では省略している）。

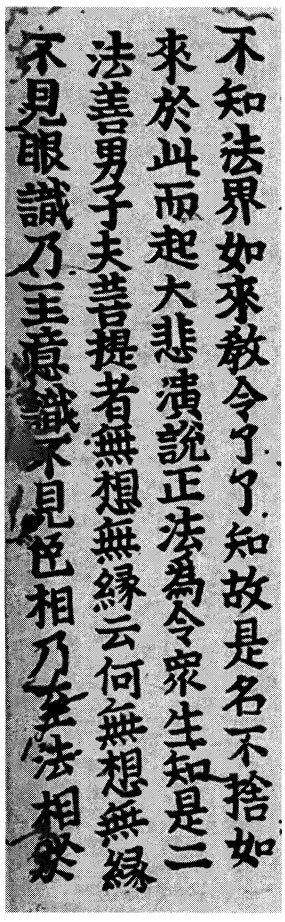
しかし、右表①～⑤は、春日版本文が、思渓版はじめ宋版諸本本文と合わず、聖語蔵本または七寺蔵本本文と一致する。

①は、宋版思渓版・東禅寺版・開元寺版いずれにも「所見」とあり、春日版「邪見」は誤刻かと思われた。ところが、古写経二本は、当該箇所を「邪見」とする。春日版本文は、これに一致する。②「爲客」も、同様である（宋版諸本「爲欲」―古写経「爲客」）。

また、③④では、宋版諸本に見られない「無想」が春日版に追加されている。この二字も、古写経当該箇所には存する[7]。③では、春日版は「無想」の二字を追加するため、前行と当行とを十八字にしている（下写真）。



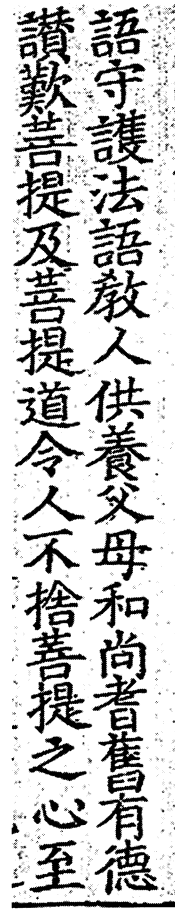
増上寺蔵思渓版『大集経』　巻第二第8板に依る・三行目全十七字最下「無想」



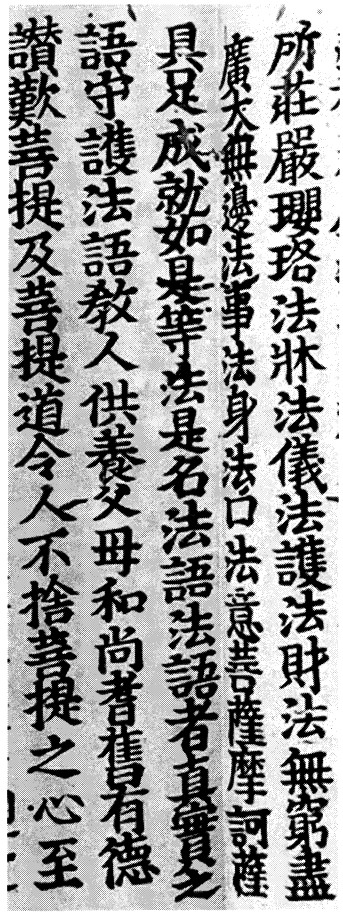
光明寺蔵春日版『大集経』　巻第二第7板に依る・三行目全十八字最下「無想無縁」

巻第五～第七についても、春日版と古写経および思渓版経本文とを対照し、同様の結果を得た。対照表の掲出は省略し、巻第五における類例を左に掲げる。

増上寺蔵思渓版『大集経』巻第五第4板に依る・三行目全十七字下方「法者」


所莊嚴瓔珞法牀法儀法護法財法無窮盡
廣大無邊法事法身法口法意善薩摩訶薩
具足成就如是等法是名法語法者真實之
語守護法語教人供養父母和尚耆舊有德
讃歎菩提及菩提道令人不捨菩提之心至

光明寺蔵春日版『大集経』巻第五第4板に依る・三行目全十八字下方「法語者」


所莊嚴瓔珞法牀法儀法護法財法無窮盡
廣大無邊法事法身法口法意善薩摩訶薩
具足成就如是等法是名法語法語者真實之
語守護法語教人供養父母和尚耆舊有德
讃歎菩提及菩提道令人不捨菩提之心至

以上の具体例から、春日版は、思渓版を基に版下を作った後、聖語蔵本・七寺蔵本などとして今に伝わる、日本伝承経本文と対校し刻板を修訂している、と判断される。

2 『大般涅槃経後分』

『大般涅槃経後分』巻上本文は思渓版と全同であることを、別稿（註（1））に記した。

左に、聖語蔵神護景雲経・甲種写経ともに残存する『大般涅槃経後分』巻下について、春日版と思渓版との本文が異なる箇所に限定して、聖語蔵二本の本文を掲げる。

所在　春日版	思渓版	神護景雲経	甲種写経№1943
① 0909a11: 著新氎上	著於氎上	著新疊上	（同）
② 0910b16: 一切茶毘火不燃	一切茶毘火不然	一切茶毘火不然	（同）
③ 0907c19: 一切大人	一切天人	一切天人	一切天人
④ 0908c15 等: 音樂絃歌	音樂弦歌	音樂弦歌	音樂弦歌
⑤ 0910b15: 佛於大般涅槃内	佛於大般涅槃中	佛於大般涅槃中	佛於大般涅槃中

右①②は、春日版が古写経系本文を取り込んだものと考えられる。③は春日版の誤刻、④⑤は春日版の改変であろう。

3 『摩訶般若波羅蜜経』

まず、春日版『摩訶般若波羅蜜経』巻第一を思渓版と比較して異なる字句を抜き出し、聖語蔵隋唐経の当該箇所本文を記す[8]。

所在　春日版	思渓版	聖語蔵隋唐経 0133
① 0217a15: 空無相無作	空無相無得	（同）
② 0218c18 等: 一切種智知[9]	一切種知	（同）
③ 0220b16: 肉眼天眼	天眼肉眼	（同）
④ 0220c07: 普照者	普照	（同）
⑤ 0220a02: 當學般若波羅蜜欲以一食[10]	欲以一食	欲以一食

春日版と思渓版とが異なるのは、巻第一全体で右の五箇所に過ぎない。その内、①～④は、聖語蔵隋唐経の本文と一致する。残る⑤は、前後に見られる「當學般若波羅蜜」の一句七字を春日版が挿入したものである。同一本文の写経を参照したか、あるいは、春日版制作者の判断で後補したものであろう。

4 『大方広仏華厳経』

春日版『大方広仏華厳経』（古華厳）は、分巻法・分函法とも思渓版に一致し、東禅寺版・開元寺版とは異なることを別稿（註（1））で指摘した。古写経の分巻・分函法は、「六十華厳」と通称されるとおり、五十巻に仕立てる東禅寺版・開元寺版とは異なり、春日版・思渓版に等しい。

経本文も、春日版と思渓版とは極めてよく一致する。[11]

しかし、春日版は、思渓版には見られない品名を加筆している。その、思渓版には無く春日版に存する品名は、古写経の品名と一致する。具体的には、思渓版に無いにもかかわらず春日版に彫られている、巻第二の品名「世間淨眼品下」、巻第四の「盧舎那佛品」は、聖語蔵神護景雲経や七寺蔵本・金剛寺蔵本の古写経には写されている。

よって、春日版は、これらの品名を古写経から採ったものと考えられる。

5 春日版・思渓版および古写経の本文

以上、『大方等大集経』『大方広仏華厳経』『大般涅槃経後分』『摩訶般若波羅蜜経』について、鎌倉後期春日版・思渓版および古写経本文を比較してきた。その結果、次のことが知られた。

ⅰ 春日版『大方等大集経』『大方広仏華厳経』『大般涅槃経後分』『摩訶般若波羅蜜経』本文は、東禅寺版・開元寺版ではなく、思渓版によく一致する。

ⅱ 思渓版と異なる春日版本文は、古写経本文と一致する。

ⅲ 春日版は、思渓版を基とした本文を、古写経によって修正している。品名も、古写経から採っている。

三 春日版・東禅寺版と古写経

春日版「五部大乗経」は、『大般涅槃経』のみ東禅寺版補刻本に依っていることが、刻記と本文比較とによる別稿（註（1））の検討から判明している。

春日版が『大般涅槃経』に限り東禅寺版を底本にしたのは、なぜであろうか。

春日版が『大集経』等の底本として思渓版を選んだのは、思渓版が日本伝来古写経に近い本文であったため、と考えられた。ここまでの考察が妥当であれば、春日版が東禅寺版補刻本を採用した曇無讖訳『大般涅槃経』は、思渓版より東禅寺版の方が古写経系本文に近いものと推測される。この点を以下に確認する。

1 『大般涅槃経』本文における春日版と東禅寺版・思渓版および古写経

ここでは、金剛寺本が首欠ながら巻尾まで残る巻第八について、春日版と東禅寺版補刻本・金剛寺本・思渓版との本文異同を示す（明らかな誤写は、掲出を省略する）。

所在　春日版	東禅寺版補刻本	金剛寺蔵本（北本）	思渓版
① 0411a17: 甜味	（同）	甘味	甘味
0411b05: 若言乳中	（同）	酪若言乳中	（同）
② 0411b28: 妙藥天王	（同）	妙藥大王	妙藥大王
0411c11: 法身猶如雷	（同）	法身相猶如雷	（同）
③ 0411c16: 所不能報	（同）	所不能服	所不能服
0411c17: 如汝所歎	（同）	如汝所嘆	（同）
i 0411c18: 是佛性者云	（同）	（同）	佛性者云
0411c21: 金篦決其眼膜	（同）	金褌決其眼膜	（同）
0412a05: 遠路朦朧	（同）	遠路矇籠	（同）
ii 0412a07: 渴逼遍行	（同）	（同）	渴逼徧行
④ 0412a09: 見白鶴	（同）	是（[朱]見）白鶴	是白鶴
0412a11: 無量百千由旬	（同）	無量百千万由旬	（同）
iii 0412a12: 大舶樓櫓	（同）	（同）	太舶樓櫓
0412a13: 必定之心	（同）	畢定之心	（同）
iv 0412a15: 極軟弱	（同）	（同）	極懦弱
⑤ v 0412a18: 電光暫發	電明暫發	電明暫發	電明暫發
⑥ 0412a20: 雖生牛相	（同）	雖生牛想	雖生牛想
⑦ 0412a27 等：久視	（同）	久觀	久觀
vi 0412b08: 微細難見	（同）	微細難見（[朱]知）	微細難知

（以下、省略）

予想に反し、本経では、思渓版よりも東禅寺版補刻本が古写経本文に近いとは言えない。①～⑦は思渓版と金剛寺写本とが同一、i～viは東禅寺版と金剛寺写本とが同じである。古写経本文との近さの点で、東禅寺版補刻本と思渓版とは、大差が無い。

2　『大般涅槃経』品名における春日版と東禅寺版・思渓版

ところが、『大般涅槃経』は、東禅寺版と思渓版との品名が大きく異なる。左のごとくである。

	春日版	東禅寺版補刻本	思渓版
巻第一	寿命品第一	（同）	寿命品第一之一
巻第二	寿命品第一之二	（同）	（同）
巻第三	壽命品第一之三	（同）	（同）
	金剛身品第二	（同）	（同）
巻第四	**名字功徳品第三**	**（同）**	／
	如来性品第四之一	**（同）**	**名字功徳品第三**
			如来性品第四之一
巻第五	如来性品第四之二	（同）	（同）
巻第六	如来性品第四之三	（同）	（同）
巻第七	如来性品第四之四	（同）	（同）
巻第八	如来性品第四之五	（同）	（同）
巻第九	如来性品第四之六	（同）	（同）
巻第十	如来性品第四之七	（同）	（同）
	一切大衆所問品第五	**（同）**	**一切大衆所問品第五之一**
巻第十一	**現病品第六**	**（同）**	**一切大衆所問品第五之二**
	聖行品第七	**（同）**	**現病品第六**
			聖行品第七之一
巻第十二	聖行品第七之二	（同）	（同）
巻第十三	聖行品之三	（同）	聖行品第七之三
巻第十四	聖行品之四	（同）	聖行品第七之四
巻第十五	梵行品第八	（同）	梵行品第八之一
巻第十六	梵行品第八之二	（同）	（同）
巻第十七	梵行品第八之三	（同）	（同）
巻第十八	梵行品第八之六	（同）	梵行品第八之四
巻第十九	梵行品第八之五	（同）	（同）
巻第二十	梵行品第八之六	（同）	（同）
	嬰児行品第九	（同）	（同）
巻第二十一	光明遍照高貴徳王菩薩品第十	（同）	光明徧照高貴徳王菩薩品第十之一
巻第二十二	高貴徳王菩薩品第十之二	（同）	光明徧照高貴徳王菩薩品第十之二

卷第二十三	高貴德王菩薩品第十之三	（同）	光明徧照高貴德王菩薩品第十之三
卷第二十四	高貴德王菩薩品第十之四	（同）	光明徧照高貴德王菩薩品第十之四
卷第二十五	高貴德王菩薩品第十之五	（同）	光明徧照高貴德王菩薩品第十之五
卷第二十六	高貴德王菩薩品第十之六	（同）	光明徧照高貴德王菩薩品第十之六
卷第二十七	師子吼菩薩品第十一之一	（同）	（同）
卷第二十八	師子吼菩薩品第十一之二	（同）	（同）
卷第二十九	師子吼菩薩品第十一之三	（同）	（同）
卷第三十	師子吼菩薩品第十一之四	（同）	（同）
卷第三十一	師子吼菩薩品第十一之五	（同）	（同）
卷第三十二	師子吼菩薩品第十一之六	（同）	（同）
卷第三十三	師子吼菩薩品第十一之七	（同）	（同）
	迦葉菩薩品第十二之一	（同）	迦葉菩薩品第十二
卷第三十四	迦葉菩薩品第十二之二	（同）	迦葉菩薩品第十二之三
卷第三十五	迦葉菩薩品第十二之二	迦葉菩薩品第十二之三	（同）
卷第三十六	迦葉菩薩品第十二之三	（同）	迦葉菩薩品第十二之四
卷第三十七	迦葉菩薩品第十二之四	（同）	迦葉菩薩品第十二之五
卷第三十八	迦葉菩薩品第十二之五	（同）	迦葉菩薩品第十二之六
	憍陳如品上第十三	憍陳如品	憍陳如品　第十三之一
卷第三十九	憍陳如品第十三之二	（同）	（同）
卷第四十	憍陳如品第十三之三	（同）	（同）

春日版の品名は、本文依拠本である東禅寺版補刻本に一致する。ただし、巻第三十五は春日版の誤刻、巻第三十九は東禅寺版の脱字を春日版が補ったか、東禅寺版の欠損であろう。

これに対し思渓版は、巻第三・四、巻第十・十一の所属品が春日版と異なる。また、巻第十五と巻第十六とに「梵行品第八之二」を重出するなど、本経の品名について、思渓版は精彩を欠く。

3 『大般涅槃経』分巻・品名における古写経と東禅寺版・思渓版

では、古写経『大般涅槃経』（北本）の分巻・品名は、東禅寺版（補刻本）に近いのであろうか。

次に北涼・曇無讖訳『大般涅槃経』における古写経の巻首品名を掲げる。[12] 東禅寺版補刻本および思渓版の巻頭品名も再掲する。

古写経	東禅寺版補刻本	思渓版
巻第　一		
巻第　四		
巻第　五		
巻第　六		
巻第　七		
巻第　十一		
巻第　十二		
巻第　十三		
巻第　十四		
巻第　十五		
巻第　十六		
巻第　十七		
巻第　十八		
巻第　十九		
巻第　二十		
巻第二十一		
巻第二十二		
巻第二十四		
巻第二十七		
巻第三十		
巻第三十一		
巻第三十二		
巻第三十四		
巻第三十八		
巻第三十九		
巻第四十		
寿命品第一	**(同)**	**寿命品第一之一**
名字功徳品第三	如来性品第四之一	(同)
如来性品之二	如来性品第四之二	如来性品第四之二
如来性品之三	如来性品第四之三	如来性品第四之三
如来性品之四	如来性品第四之四	如来性品第四之四
現病品第六	**(同)**	**一切大衆所問品第五之二**
聖行品之二	聖行品第七之二	聖行品第七之二
聖行品之三	**(同)**	**聖行品第七之三**
聖行品之四	**(同)**	**聖行品第七之四**
梵行品第八	**(同)**	**聖行品第七之二**
梵行品之二	梵行品第八之二	梵行品第八之二
梵行品之三	梵行品第八之三	梵行品第八之三
梵行品之四	梵行品第八之六	梵行品第八之四
梵行品之五	梵行品第八之五	梵行品第八之五
梵行品之六	梵行品第八之六	梵行品第八之六
光明遍照高貴徳王菩薩品第十	**(同)**	**光明徧照高貴徳王菩薩品第十之一**
高貴徳王菩薩品之二	**高貴徳王菩薩品第十之二**	**光明徧照高貴徳王菩薩品第十之二**
光明遍照高貴徳王菩薩品第十之四	高貴徳王菩薩品第十之四	光明徧照高貴徳王菩薩品第十之四
師子吼菩薩品第十一	師子吼菩薩品第十一之一	師子吼菩薩品第十一之一
師子吼菩薩品第十一之四	(同)	(同)
師子吼菩薩品之五	師子吼菩薩品第十一之五	師子吼菩薩品第十一之五
師子吼菩薩品之六	師子吼菩薩品第十一之六	師子吼菩薩品第十一之六
迦葉菩薩品之二	迦葉菩薩品第十二之二	迦葉菩薩品第十二之二
迦葉菩薩品之五	迦葉菩薩品第十二之五	迦葉菩薩品第十二之六
憍陳如品之二	憍陳如品第十三之二	憍陳如品第十三之二
憍陳如品之三	憍陳如品第十三之三	憍陳如品第十三之三

右の通り、東禅寺版（補刻本）・思渓版とも、古写経と分巻法・品名の異同をそれぞれに見せる。

しかし、古写経と東禅寺版との相違は、東禅寺版が品名の通番を付したための異同が大部分であり、分巻にかかわる異同は巻第四のみである。

一方、思渓版は、その巻第四を「名字功徳品第三」から始める点は古写経と同じであるものの、巻第十・十一の分巻法と巻第一・十三～十五・二十一・二十二の品名表示法が古写経とは異なる。

以上、本経の分巻・品名表示法では、思渓版よりも、東禅寺版（補刻本）の方が古写経に近いと言える。

四　春日版「五部大乗経」の底本選択理由

『大方等大集経』『大方広仏華厳経』『大般涅槃経後分』『摩訶般若波羅蜜経』の経本文は、東禅寺版・開元寺版よりも、思渓版が古写経に近かった。また、『大般涅槃経』（北本）における分巻法と品名は、思渓版よりも、東禅寺版が古写経に近かった。

そして、鎌倉後期開版春日版「五部大乗経」は、『大方等大集経』『大方広仏華厳経』『大般涅槃経後分』『摩訶般若波羅蜜経』は思渓版に、『大般涅槃経』は東禅寺版（補刻本）本文に依拠していた。

これらの実態から判断して、春日版は、古写経の分巻法と品名あるいは経本文に近いか否かによって底本の宋版を選択した、と考えられる。[13]

五　むすび

本稿の目的は、次の二点であった。

A　鎌倉後期開版春日版「五部大乗経」が単なる宋版の覆刻ではなく、古写経系本文を取り込んでいることを具体的に示すこと。

B　春日版「五部大乗経」の底本選択理由を考察すること。

本稿の検討の結果、次のことが知られた。

A　春日版は、宋版に基づいて製版した後、古写経との本文校合作業を経て、古写経本文と一致する字句に補訂し、品名を取り込んでいる。

B　春日版「五部大乗経」は、『大方等大集経』『大方広仏華厳経』『摩訶般若波羅蜜経』『大般涅槃経後分』については思渓版が、『大般涅槃経』については東禅寺版が、古写経に近かったために底本として選んだ。

本稿での比較範囲に限れば、宋版諸本中、思渓版は古写経に近い本文を有することが多い。尊氏願経・北野社一切経などの底本として思渓版が選ばれたのも、[14] おそらくそのためであろう。嘉慶二年（一三八八）奉納の日光山輪王寺蔵五部大乗経も、思渓版を底本としているらしい。[15] その後、寛永十四年（一六三七）開版天海版の主たる底本ともされた。[16]

ただし、宋版に基づく書写・刊行は、その宋版本に全面的に依拠するという姿勢ではなかった。

竹生嶋寶厳寺蔵の春日版『大般若経』五五〇帖は、文永二年（一二六五）五月十四日から南都山階寺で印写が始まり、同六月一日より北嶺寶幢院東実坊において校合された。その校合には、北尾蓮乗坊、鞍馬寺の写本、および宋版経などを用いたことが知られるという。[17] また、春日版『大般若経』を書写経によって校合することが、鎌倉中期～後期の恒心・延玄・圓順・融乗へと引き継がれたことも指摘されている。[18]

本稿で採り上げた鎌倉後期刊春日版「五部大乗経」の場合も、古写経に近いか否かで底本が決定され、本文彫刻後の校合に古写経を用いた、と考えら

れた。板を彫り直してまで追加・訂正した箇所の本文は、重要な本文異同箇所であったはずである。

仏教諸学の研究に、思渓版を初めとする宋版テキストならびに日本伝存古写経・古版本が、より一層活用されることが期待される。

註

（1）佐々木 勇「春日版『五部大乗経』の底本とされた宋版一切経（一）―刻記の比較による検討―」（『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部第64号、二〇一五年十二月）、同「春日版『五部大乗経』の底本とされた宋版一切経（二）―本文の比較による検討―」（同上紀要第65号、二〇一六年十二月）、同「春日版『五部大乗経』の底本とされた宋版一切経（三）―釋音の比較による検討と宋版との相違点―」（同上紀要第66号、二〇一七年十二月刊行予定）。

その他の春日版、『梵網経』・『仁王般若波羅蜜経』・『仏垂般涅槃略説教誡経』・『菩薩瓔珞本業経』は、東禅寺版・開元寺版よりは思渓版に近いものの、宋版一切経に依拠したとは断言できない。鎌倉時代後期彫刻春日版「五部大乗経」においても、伝統的な春日版風の書体で彫られた『妙法蓮華経』・『無量義経』・『観普賢経』、および疑経『像法決疑経』とともに、底本推定は今後の課題である。

なお、大屋徳城『寧楽刊経史』（内外出版、一九二三年）一九九頁、同「春日板雕造攷」（便利堂、一九四〇年）、川瀬一馬「古写経と古版経」（『大東急記念文庫 貴重書解題 仏書之部』〈大東急記念文庫、一九五六年〉所収）、同「樹下神社蔵佐々木崇永開版の大般若経 附、同蔵春日版五部大乗経ほか」（『かがみ』第二十号、一九七六年三月）に従い、春日版とした。同版「五部大乗経」は、各地の寺社・文庫・博物館等に現存している。かりに春日版でなかったとしても、宋版に基づきつつ古写本本文を取り込んだ日本版本が広く刊行された、とする本稿の趣旨に変更はない。

（2）光明寺蔵本全体の書誌・伝来等については、土居聡朋「愛媛県伊予郡砥部町光明寺所蔵・版本五部大乗経について―元版覆刻和版五部大乗経の一事例として―」（『愛媛県歴史文化博物館 研究紀要』第十二号、二〇〇七年三月）に詳しい。なお、この光明寺蔵本は、愛媛県歴史文化博物館に寄託されており、土居聡朋氏を初めとする博物館の皆様に閲覧の便宜を図っていただいた。光明寺蔵本の調査には、国際仏教学大学院大学の主任研究員上杉智英氏・同研究補助員前島信也氏、ならびに広島大学大学院博士課程後期大学院生の坂水貴司氏の助力を得た。また、樹下神社蔵本の巻首巻末写真を、滋賀県教育委員会の井上優氏から御貸与いただき、その後、大津市教育委員会和田光生氏のご紹介により、原本閲覧の機会を得た。樹下神社の平野修保宮司・川端陽太郎責任役員代表はじめ役員の皆様に、大変お世話になった。記して御礼申しあげる。この調査でも、上杉氏・前島氏、佛教大学非常勤講師の南宏信氏、大東急記念文庫の村木敬子氏、比治山大学常勤講師の刀田絵美子氏、ならびに広島大学大学院博士課程後期大学院生の申智娟氏・坂水貴司氏にご助力いただいた。感謝申しあげます。

（3）飯田剛彦「聖語蔵経巻「神護景雲二年御願経」について」（『正倉院紀要』第34号、二〇一二年三月）における紙背墨書・写経所文書の研究から、大部分は宝亀年間に書写されたことが判明した。本稿では、通称に従い、「神護景雲経」と呼ぶ。

（4）無―无、惠―慧、脩―修、莊―庄、慚―慙、軟―輭―耎、二十―廿、三十―卅、然―燃、智―知、笑―咲、邪―耶、喜―憙、焰―炎、響―嚮などの字体等の差は、採り上げない。

（5）左が、単一本の誤刻・誤写と判断された例である。この中にも、意図的・有意味の改変が含まれている可能性が残る。

所在	春日版	聖語蔵本	七寺蔵本	思渓版
0009a15: 不爲邪法	（同）	爲不邪法	（同）	（同）
0009a26: 六者心解脱法光	（同）	（同）	六者心解―法光	（同）
0009b11: 爲到益	爲利益	爲利益	爲利益	爲利益

0009b19: 修集不放逸　（同）　集修不放逸　（同）
0009b27: 邪法不能動　（同）　邪法不動能　（同）
0009b29: 爲衆破下意　（同）　爲衆破下志　（同）　如智真實便　（同）
0009c04: 知眞實方便　（同）　（同）　（同）　故脩无量智　（同）
0009c18: 故修無礙智　（同）　（同）　（同）　如是忘見　（同）
0010a07 等: 如是妄見　（同）　（同）　（同）　身取觸想　（同）
0010a20: 身取觸相　（同）　（同）　（同）　悲因緣　宣説　（同）
0010a21: 悲因緣故宣説　（同）　（同）　（同）　一者慢　（同）
0010a23: 二者慢　一者慢　（同）　（同）　五聚陰　（同）
0010b21: 五取陰　（同）　（同）　（同）　菩薩修集悲　（同）
0010c01: 菩薩修悲　（同）　（同）　（同）　上解　（同）
0010c07: 上解上欲　（同）　（同）　（同）　（同）　（同）
0010c21: 諸衆生懶惰　諸衆生嬾墮　衆生繫屬　（同）　衆生繫屬　（同）
0010c29: 衆生繫縛　衆生繫屬　（同）　（同）　自身念脩　（同）
0011a25: 自身命修　（同）　（同）　（同）　未常遠離　（同）
0011b28: 未嘗遠離　如來於此而欲　（同）　（同）　（同）　（同）
0011c04: 如來於此欲　（同）　（同）　（同）　淨名　内　（同）　（同）
0011c06: 淨名爲内　（同）　（同）　（同）　以故　（同）　（同）
0011c07: 何以故　是名爲无性　（同）　（同）　知衆生　（同）　（同）
0012a08: 是名無性　（同）　／　／　／　／　／
0012a18: 知衆生界　无取　名　寂靜寂　無果果
0013a21: 無漏無取
0013a27: 名爲寂靜
0013c05: 無量果

（6）聖語蔵本は首欠でありながら、春日版の開始より前に二十三行の本文を持ち、七寺蔵本には先に二四八行が有る。また、大正新修大蔵経校注のとおり、0014a03: 無量功徳で聖語蔵本は巻第二を終えている。七寺蔵本は、さらに早く、0012b05: 令知故で巻第二が終わる。右の比較は、巻第二中の同一本文部分において行なった。

（7）聖語蔵本本文は、当該部分本文に対応する『大方等大集経』巻第六が残存しないため、確認できない。七寺本巻第六該当部分は、それぞれ、「是名説義」「令衆遠離」である。

（8）巻第十二・十五についても対照し、同様の結果を得た。紙幅の関係で、対照結果の掲出は省略する。

（9）春日版はこの行を十八字にして「智」を補入している。思渓版は、この行十七字である。

（10）春日版は「當學般若波羅蜜」七字を挿入するため、六行かけて文字数を調整している。

（11）春日版『大方広仏華厳経』巻第二「0404c04: 恭敬」では、春日版は思渓版「敬」の欠筆を欠筆のまま彫っている。東禅寺版・開元寺版は、同一箇所を欠筆にしない。

（12）主に、『石山寺の研究　一切経篇』（法蔵館、一九七八年）、『石山寺古経聚英』（法蔵館、一九八五年）に掲載の平安初期・中期・院政期写本の内題に依る。また、日本古写経研究所データベース、文化庁『国宝・重要文化財大全7　書跡・上巻』（毎日新聞社、一九九八年）、『京都国立博物館蔵品図版目録　書跡編　日本』（同朋舎、一九八三年）、国立国会図書館デジタルコレクションをも参照した。なお、比較的多くの巻が現存し、かつ、画像が公開されている古写経である聖語蔵甲種写経・七寺蔵本は、大部分が宋・慧厳（三六三―四四三）等訳南本『大般涅槃経』であるため、表には採っていない。

（13）『妙法蓮華経』の底本を宋版としなかったのも、宋版諸本で『妙法蓮華経』を全七巻とすることが、全八巻としてきた平安・鎌倉時代の日本写経と異なるためであろう。

（14）羽田聡『足利尊氏願経の原本調査を中心とした中世一切経の資料的研究』（二〇一三年三月、平成二三―二四年度科学研究費助成事業若手研究（B）研究成果報告書）、佐々木 勇「足利尊氏発願一切経の底本」（『かがみ』四六、二〇一六年三月）、同「尊氏願経と宋版一切経思渓版」（『MUSEUM』第659号、二〇一五年十二月）、臼井信義「北野社一切経と経王堂―一切経会と万部経会―」（『日

本仏教』三、一九五八年三月）、参照。なお、北本『大般涅槃経』の底本として東禅寺版を採用する点は、尊氏願経も同様である（右佐々木論文、参照）。意図的な底本選択がなされた可能性が有る。

（15）千田孝明「嘉慶二年日光山新宮施入の五部大乗経（輪王寺蔵）について」（『栃木県立博物館研究紀要』第四号、一九八七年三月）掲載の写真から、本稿の筆者が判断した。

（16）野沢佳美「天海版大蔵経の底本に関する諸説の再検討」（『立正史学』七七、一九九五年三月）、参照。

（17）高橋正隆『大般若経の流布』（善慶寺、一九九五年）六四頁。

（18）稲城信子「鎌倉期における経典印刷と流布―春日版大般若経を中心に―」（『国立歴史民俗博物館研究報告』七二、一九九七年三月。後、『日本中世の経典と勧進』〈塙書房、二〇〇五年〉に収載）。

［付記］本稿は、国際仏教学大学院大学　平成27年度公開研究会（二〇一五年十一月七日）における口頭発表に基づく。発表当日、参会の皆様から多くのお教えを頂いた。また、増上寺ならびに愛媛県歴史文化博物館から、画像公開の御許可を賜わった。記して御礼申しあげます。

The Original Text of the Kasuga Edition of the *Gobu daijō kyō* and the Reasons for Choosing a Copy-Text

Isamu Sasaki

This paper has two goals:

A. To show that the Kasuga edition 春日版 of the *Gobu daijō kyō* 五部大乗経 (hereafter K-Gdk), which basically reproduces the text of the Song edition 宋版 of the Buddhist Canon, also includes readings from old Japanese manuscripts.

B. To examine the reasons for choosing the copy-texts for the K-Gdk.

My research has led to the following conclusions:

A. After the manufacturing of the wooden blocks of the K-Gdk on the basis of the Song edition, the editors emended the text by adopting readings which agree with the old Japanese manuscripts. Chapter titles were also included.

B. The K-Gdk made use of the Sixi edition of the Song Canon 宋版思渓版 as the copy-text for the following texts: the *Da fangdeng da ji jing* 大方等大集経, the *Da fengguang fo huayan jing* 大方広仏華厳経, the *Mohe bore poluomi jing* 摩訶般若波羅蜜経, and the *Da banniepan jing hou fen* 大般涅槃経後分. This is because the Sixi edition of the Song Canon was close to the readings of the old Japanese manuscripts. As far as the *Da banniepan jing* 大般涅槃経 is concerned, the K-Gdk editors adopted the Tōzen-ji edition of the Song Canon 宋版東禅寺版 as the copy-text. The reason was the same: the latter's readings were close the old Japanese manuscripts.

Those parts which were emended and/or added to the wooden blocks most likely represent important variant readings.

I hope that further research on the Sixi edition and other Song editions of the Canon as well as on old Japanese manuscripts and incunables will bring a significant contribution to the study of Buddhism in its various aspects.